

巻頭言



ボランティアの時代

梶木 公一†



ある文系の研究者に情報処理学会の会員数が3万人の話をしたら、「それは学会ですか？」と問い返された。大学や研究機関の研究者が大部分を占める人文・社会科学系の学会に比べ、工学系の学会には研究者以外に企業などに所属する実務家や技術者も数多く参加している。入会の資格条件も緩めてなるべく多くの会員を集め、研究者と技術者、実務家の交流の場と自己啓発の機会を広く提供している。時代の流れに沿ったオープンな形態であるが、反面単に会員であるだけでは高い社会的評価は望めない。先端的研究や技術の教育・啓蒙・普及など具体的な活動を通して社会に貢献し、学会の存在感を増すことによって評価されなければならない。

情報処理技術は世の中のさまざまな分野での基盤技術として活用され、情報処理学会が担う社会的役割はますます重要になっている。しかし、この数年の会員数は横ばい状態であり、新たな変革を模索するため将来ビジョン検討委員会が設置され、活性化の具体的な実施項目が検討されている。

会員全員に対するサービスの1つであり、大多数の会員にとっては学会との唯一の接点となる学会誌に関しても、魅力ある読物に脱皮することが強く求められている。読者からは、難しい、役に立たない、新鮮味がない、興味が湧かない、などのお叱りを受けて継続的にその改善が進められてきたが、まだまだ満足いただけるレベルには達していない。商業誌と比べると読んでもらうことへの必死さは少なく、記事の新鮮さという点でも見劣りするの確かである。しかし、学会誌の役割と発刊活動の実態からみれば商業誌のような編集スタイルをとることは現時点では困難であろう。むしろ商業誌とは一線を画した編集方針を確立し、その中で最大限の努力をすることが急務であると思う。

いうまでもなく学会活動の源泉はボランティア

活動である。共通の目的・問題に取り組むためにお互いの存在を必要とする人々の集まりが学会であり、その活動を支えるため多くのボランティアが参加している。学会誌に関しては3つのボランティアチームが活動している。「作り手」は、特集、解説、講座など魅力あるテーマでの枠組みを作り、書き手を捜し出して原稿を依頼する。「書き手」は作り手の意図を斟酌し、定められた期日までに読みやすく質の高いコンテンツを作成する。「読み手」はモニタとして発行された学会誌を細部にわたって厳しい評価をして作り手と書き手にフィードバックする。なかなか理想的には事が運んではいないが、年間300名以上のボランティアが学会誌の定期発刊を支えている。専門書と商業誌の狭間にある学会誌の主な役割は、各分野での体系化された情報を提供して知識の共有と裾野の拡大をはかり、その成果としてできるだけ多くの会員を学会のさまざまなボランティア活動に誘うことであろう。

「ボランティアとは切実さをもって問題に関り、つながりをつけようと自ら動くことによって新しい価値を発見する人である。働きかけに対して相手が応じてくれることを期待し、自発的に行動する。働きかけと呼応の関係性によってつながりをつけていくプロセスそのものがボランティア活動である。」(金子郁容著『ボランティア もうひとつの情報社会』岩波新書)

組織に所属する者にとってこれからは組織内評価にとどまらず一専門家としての外部的評価も重要になる。個が主役になる時代の始まりであり、個のネットワークを築いて自ら情報発信をしていかなければならない。その1つの手段として学会活動という「つながりをつけるプロセス」を積極的に利用されることを期待したい。個々の会員の活動が活性化されれば、それは学会全体の活性化の強い味方になるはずである。

†本会学会誌担当理事 新潟国際情報大学

(平成8年11月5日)